

キャタピラージャパン株式会社 様

パッケージの導入と果敢な挑戦が、再構築プロジェクトを成功へと導いた

建設機械「CATERPILLAR(キャタピラー)」ブランドを掲げ、品質にこだわり、常に市場の一步先を進むキャタピラーグループ。その一員であるキャタピラージャパン株式会社は、米国のキャタピラー社と日本の三菱重工という2つの世界的なメーカーの技術と文化を継承し、グローバルに活躍しています。東京ドーム20個分ほどの広大な敷地をもつ同社の相模事業所では、IFS Applicationsを導入し、仕入れ・加工・組立の一貫生産方式で、トラクタや油圧ショベル、それらに関連するコンポーネントなどを生産しています。

個別システムの限界により、迫られる再構築への取り組み

1990年代前半まで、相模事業所では、ホストコンピュータ中心のバッチ主体のシステムを複数使用していました。このシステムは、縦割りの業務に合わせて個別に開発されたシステムを組み合わせたもので、部門間の連携も基本的には帳票レベルにとどまっていた。やがて、開発から30年の年月が経過すると、その間に各部門で個別の改善が行われてきたことも重なり、システム全体を把握できない状況に。さらに、システムの運用費用も年々肥大化し、再構築の必要に迫られることになりました。

開発費を抑え、業務標準化を図るためにパッケージソフトの導入を決断

94年、キャタピラージャパンは、社内全体の改革を推進するために10のプロジェクトを発足。そのうちのひとつが生産管理システムの再構築プロジェクトとして位置付けられ、システムの統合、MRPと製番を併用した生産方式の導入、少人数でのシステム運営、ホストコンピュータのダウンサイジングといった課題に取り組むことになりました。

最初に検討されたのは、システムの開発費を抑えるために、パッケージソフトを導入することです。パッケージの要件としては、●各部門で運用管理ができるようにオープン環境で稼動すること ●それまで一昼夜を要していたMRP

計算を2時間以内で完了すること ●MRPと製番の併用が可能なこと ●生産管理の全体機能があり、かつ、導入が順次進められるように各機能がモジュール化されていること、などが挙げられました。これらの機能面に加えて、カスタマイズ量、導入・サポート体制も併せて考慮。その結果、複数のパッケージの中から、キャタピラージャパンの要件を最も広くカバーする製品として、NEC社が提案するIFS Applicationsが選ばれました。

パッケージを導入するという決定の裏には、パッケージの提供する機能をベースに、業務の標準化を図るという狙いもあり、当時の製造業においては非常に先進的な取り組みでした。

段階的なシステム移行が奏功し、目標値を上回る成果を達成

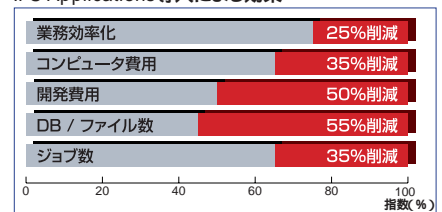
導入は3段階に分けて行われ、第一段階では基礎情報系(BOMなど)と所要計画系を、第二段階では資材調達系を、第三段階では在庫管理を、それぞれIFS Applicationsへと移行。各段階では、関連する周辺機能の強化も並行して進められました。

また、次の段階へ進むまでにはある程度の期間を置き、着実に現場への浸透を図っていきました。その際には、各部門から選出されたキーマンが、プロジェクトチームと部門とのパイプ役および現場のユーザー教育を担い、このキーマンが現場をリードしていく

ことで、新システムへのスムーズな移行が達成されました。

導入の結果、業務効率アップ、コンピュータの運営費用削減、開発費用の削減など、定量的な効果は当初の目標値を大きく上回り、加えて、管理や分析のための資料も、EXCELなどの汎用ソフトとの連携により、担当者が自由に作成できるようになりました。

IFS Applications導入による効果



今後はさらにIFS Applicationsを活用して、お客様の声を速やかに生産体制に反映できるよう、生産部門と販売部門との連携を強化。情報とモノをズレなく管理するためにRFID等の新しい技術を利用して、物流の効率化を図っていく方針です。

94年に始まったシステム再構築のプロジェクト。大きな成果をもたらしたこのプロジェクトの根底には、常に「お客様の視点」「たゆまぬ進化」「リスクに挑戦」を謳うキャタピラージャパンの企業理念がありました。お客様により一層満足していただける製品やサービスを提供するために——キャタピラージャパンの積極果敢なチャレンジはこれからも続いていきます。

